



242号
2019/4

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1



佤(ワ)族：中国南部から東南アジア北部の山間部に分布するアウストロアジア語族の少数民族。皮膚の色は黒い。竹製の高床住居に住み、男性は黒いターバンで頭を包む。万物に魂があるとする自然宗教を信仰している。1950年代まで首狩りの風習があり、かつては文字を持たない民族だった。現在はラテン文字を基本として作られたワ族文字を使用している。（雲南省普洱〈プーアール〉市にて 2018年4月 チベット高原初等教育・建設基金会代表 烏里烏沙撮影）

克己奉公 (滅私奉公)

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為”絵本から

文と訳・有為楠 君代

今日は、あまり聞き慣れない言葉です。

今月のこの言葉は、日本語では「滅私奉公」という訳語になっています。

・>・>・>・>・>・>・

東漢(後漢)の初め、^{えいよう}潁陽(現在の河南省襄城縣)に祭遵^{さいじゆん}という人がいました。彼は劉秀^{りゆうしゅう}(後の後漢・光武帝)に身を寄せ、軍事と法律を担当しました。彼は公明正大、法の執行は厳正で、私情に流されることがない人でした。

ある時、劉秀のお気に入りの侍従が法を犯したので、祭遵は法に照らして侍従を死刑に処しました。後からそれを聞いた劉秀は激怒して、直ぐに祭遵を捕らえて来るようにと命じました。ある人が劉秀に言いました:「法を厳正に施行することは元々あなたさまが命令したことで、現在、祭遵は皇帝の法律をしっかりと守ったのですから、功労者であって、咎められることはなにもしていません！」

劉秀はよくよく考えて、その通りだと納得し、捉えられてきた祭遵を罰するどころか、却って彼の官位を上げてやりました。

祭遵は、私情をはさまず仕事をしたので、彼の死後、家の中に財産は何もありませんでした。

・>・>・>・>・>・>・

言葉の意味:私欲を押えて、公の仕事を尊重する。自分を厳しく律して、公の仕事に専心することの喩え。

使い方:彼は公明正大、自分を律して公に尽くすので、人々から深く敬愛されている。

・>・>・>・>・>・>・

小学館の中日辞典には、この「克己奉公」は「滅私奉公・私心を捨てて公のために尽くすこと」となっています。「私心を捨てて公のために尽くすこと」というのはその通りですが、もう一つの「滅私奉公」というのは

正しいかどうか疑問です。日本語にも「克己」という言葉がありますから、中国語をそのままに「克己奉公」とした方が良いでしょうと思います。

「滅私」も「私心をなくす」とか「私利・私情を捨てること」という意味ですから、訳語自体が間違っている訳ではないのですが、「滅私奉公」と続けると、私くらいの年齢の者には、戦時中の軍隊の号令が思い出されて、良い気持ちがしません。

戦時中に軍隊が中心となって国民に要求した「滅私奉公」は、「私利・私欲」どころか、「心」を捨てさせて、何も考えずに唯々お国のために犠牲になることを強いるものでした。そのくせ、終戦間際の満州で見られたように、ソ連参戦の報を掴むと、自分達とその家族の安全を第一に考え、国民のことを置き去りにして撤退をしました。

軍隊が国民に強いた「滅私奉公」を、軍隊自体はしなかったことになります。もっとも、当時の意識では、国民は奉仕の対象ではなかったのでしょうか。儒教の亞聖・孟子は、国民あつての国家だといっているのに、国民に奉仕する必要はないと考えたのでしょうか。何れにしても自分たちの利益を捨て去ることはしませんでした。他人に「滅私奉公」を要求する資格はありませんね。

中国は、賄賂が歴史的に長く容認され、賄賂に対する罪悪感が薄い社会と言われますが、時々この祭遵のように、自分に厳しく潔い人が出て来ます。最近では中華人民共和国の周恩来首相もそんな方だったと言われています。

勿論日本軍の中にも、部下のことを思い、戦場の一般人のことも考えた立派な軍人さんもいらしたとの話を聞いたことがあります。何事も一括りでは語れませんね。自分を律する気持ちは、文化云々というよりも人間性の問題だと考えます。



満柏画

挿絵：満柏氏

zhāo wén dào xī sǐ kě yī
朝聞道，夕死可矣。

あした むすべ か
朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり 〈里仁第四〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄

二十歳前後の頃、『論語』の中でこの表題の一文を目にした時、何とカッコいい言葉だろうと思いました。その日のうちに命を投げ出してよいと思えるほど、それほど価値のある何かがこの世の中にあると自覚できること自体が羨ましくもありました。そんな価値のあるものは、私には到底見つけ出すことができないと思っていたからです。

ところが、何年もかかって『論語』を読み返していくうちに、この言葉にやや違和感を覚えるようになってきました。「死すとも可なり」とは、ずいぶん過激な表現ですが、そもそも『論語』はある意味では命の尊さを説いた書物です。その孔子を「死すとも可なり」という気持ちにさせた「道」とは、一体何なんだろう、と考えながら『論語』を再度見渡してみると、「道」という文字が50か所以上も出てきます。しかし、その示す意味は多岐にわたっていて、一言ではとても説明しきれません。ただ印象に残る言葉がいくつかありました。その一つは、「吾道一以貫之(Wú dào yī yǐ guàn zhī) (吾が道は一以てこれを貫く)〈里仁第四〉。私の道は一つのことで貫かれている、というものです。この意味を理解できない門人たちに対して、愛弟子の曾子は「夫子之道，忠恕而已(Fū zǐ zhī dào zhōng shù ér yǐ) (夫子の道は忠恕のみ)と解き明かしています。わが師の道はただ一つ、忠恕(誠実な心と他者への思いやり)、これに尽きると。これで見ると「道」とは、「人間としてのあるべき姿」という意味に解釈できます。

この解釈に間違いはないはずですが、これを表題の言葉に当てはめてみると、「人間としてのあるべき姿の何たるかを聞けば、その日のうちに死んでもよい」ということになります。多くの注釈書はこれを誇張表現とみなし、「道」の大切さを

強調したものだとしていますが、たとえ誇張表現であるとしても、あまりにも唐突で、孔子らしくありません。

一方、他の所では「道」について次のような語句が見えます。「天下之无道也久矣。天将以夫子为木铎(Tiān xià zhī wú dào yě jiǔ yǐ。Tiān jiāng yǐ fū zǐ wéi mù duó)」(天下の道無きや久し。天將に夫子を以て木鐸と為さんとす)〈八佾第三〉。天下の「道」が失われて久しい。だから天は孔子を地上に降して木鐸と為そうとしているのである、と。

木鐸とは大きな鈴のことで、これを鳴らして、政令を天下に知らせるための道具です。これは孔子が弟子たちを連れて衛の国に入る際、儀という国境地域を管理する衛国の或る役人が、孔子の弟子たちに語った言葉です。ここでいう「天下の道無きや」の「道」とは社会道義のこと、つまり天は、失われかけた社会道義を復活させ、広めるために孔子を天界から下界に遣わした、ということです。

天から遣わされたかどうかはともかくとして、事実、孔子は暴力を否定し、道義に基づく秩序ある平和な社会を実現するために生涯をかけていました。しかし現実世界はそれとは裏腹に、強権政治が横行し、民衆は苦しむばかり……。表題の言葉はこうした現実認識から出たものと思われます。とすると「社会道義が実現されればいつ死んでもかまわない」ということ、逆の面から言えば「それが実現されない限り死んでも死にきれない」ということにもなります。これは誇張表現でも何でもありません。晩年を迎えた孔子の素直な気持ちの表れであると同時に、次世代へのメッセージでもあったと言えるのではないのでしょうか。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

お爺さん三人の大連の旅(2)

寺西俊英

丹東駅には定刻よりも9分遅れの9時40分に到着した。到着用の改札は無いのでそのまま駅前広場に出ると、巨大な毛沢東像が威圧するように立っている。遠くを指さしているが、北京の方角か、それとも自分の故郷の湖南省・韶山市であろうか？タクシー乗り場からまず虎山長城に向かう。ここは万里の長城の東端で近年整備されて来ている。以前は、東端は河北省の山海関かと思っていたが、どうやら調査の結果この場所が東端であったようだ。虎山は、虎が横たわっている姿に見えることから付いた名前と思うが一番高い地点で70～80メートル位の山である。頂上から下を見下ろすと鴨緑江が流れている。入口に10時過ぎに到着。入場料は一人60円で、高齢者割引はない。入場するとすぐ目の前に大きな龍と筋骨隆々とした男のモニュメントがあり、下の方に横書きの字で「万里長城東端起点—虎山長城」と彫ってある。そこから少し歩くと大きな砦の形の長城の入口があり、虎



万里長城の東端の虎山長城にて

山の頂上に続くレンガ造りの坂が始まっている。まもなく遠くに鴨緑江が見え始め、川の中州にある北朝鮮の集落が望まれる。2010年の8月、この川が大雨で氾濫し大きな被害が伝えられたがこの集落も殆ど水没したのではなかろうか。新聞には金正日総書記が空軍機数十機を出動させ、5千人以上の住民を避難させたとある。この日は、川幅が広く水量豊かな鴨緑江がゆったりと南の方向に流れていた。

見張櫓と思われる建物を過ぎると、坂道は結構急勾配なので途中で引き返し、この辺りの名所である「一步跨」に歩いて行った。字の通り「一步で（向こう岸の北朝鮮側に）跨いでいける」、くら

い狭い水路がある。北朝鮮側の岸边には鉄条網が張り巡らされている。川幅はほんの10メートルくらいであろうか。走り幅跳びの日本記録が8m25なので、追い風ならギリギリ届くかもしれない。もちろんこの場所も鴨緑江の一部である。「一步跨」と彫られた石の前で観光客が次々にシャッターを切っていた。辺りにはお店が何軒かある。そこで桃を買って食べながら入り口に戻った。またタクシーに乗って次の目的地・断橋に向かった。私は、虎山長城も断橋も何度目かであるが何度来てもいい。今回は昼間であったが、前回は一泊したので

夜ライトアップされた断橋とすぐ上流に架けられた鉄橋が浮かび上がる夜景は素晴らしかった。タクシーは断橋のすぐ脇に止まった。入口で入場券を買おうとすると前回2016年に来た時には無かった説明板があり、「入場券は30元、但し60歳以上は半額、70歳以上は無料」と出ている。

本当かどうかパスポートを見せると3人とも無料で入

れた。李さんだけ30元のチケットを買ってあげた。たかだか30元（約480円）であるが、随分得をした気持ちになるものだ。断橋は朝鮮戦争（1950年勃発—1953年停戦）時に米軍機が爆撃し、惜しくも鉄橋の中央部にある大型船航行のために回転する部分から北朝鮮側の橋梁が失われている。この度、橋にいくつかの説明板が取り付けられているのをゆっくり見ながら回転部分まで歩いて行った。そしてある写真のところでこの橋が造られた状況を初めて知った。説明には断橋は1909年に工事が始まり、1911年に完成したとある。つまり100年余り前に日本が技術の粋を集めて建設したのだ。顧みれば1868年

の明治維新から40年後には、かくも立派な鉄橋を自前の技術で建設したわけであり日本人として誇らしい。橋の中央が回転して大型船が航行する当時の写真を見ると何とかこの橋を残して欲しかったと思う。

断橋の100メートル上流に、北朝鮮問題に変化があれば必ずと言っていいほどテレビでこの橋の映像を流すのでご覧になられた方も多いと思うが、近代に造ったこれまた立派な鉄道・道路併用橋が架かっている。主としてこの橋を通して中国は北朝鮮に物資を輸送しているが、行った日の8月13日は鉄道車両やトラックは一両も一台も経済封鎖により動いていなかった。今年の1月上旬、金正恩朝鮮労働党委員長が北京に行ったがやはり特別仕立ての列車でこの橋を通過している。驚いたのは断橋の先端から北朝鮮が近くに望めるが、対岸に6～7階建てのビルが自分の存在を主張するように建っていたことである。これまで3回くらいこの場所に来たが、中国側の高層ビル群とは対照的に暗く沈んだ感じの農村風景だったのだ。ただ北朝鮮が自力で建設できたのか、中国側の援助によるものかは定かではない。

12時を回ったので断橋を後にして昼食を食べに行くことにした。2016年に来た時に、丹東は朝鮮料理店が多いのでタクシー運転手に「美味しい朝鮮料理店に行ってください」というと、「長白山」と看板が出ている店の前で降ろしてくれた。長白山はご存知の通り中国側の名前で、北朝鮮では「白頭山」と呼ぶ聖なる山である。日本の富士山に相当する山で、朝鮮料理店に行くとよく頂上に美しい湖のあるこの山の写真を掲げている。店の名は正式には、「長白山朝鮮族料理店」であるが何年か前にテレビで紹介された店と入口の看板にあり、現地では有名な店のようなのである。4人ともビビンバを注文したがとても美味しかった。一つ32円でレジで128元支払った。「長白山」を出て丹東駅に向かう。途中「玉」の専門店があり入ってみた。店員に聞くと岫岩（シュエユエン）の産だそう。東北地方では、岫岩は玉の産地で有名である。以前は山の中の町で交通が不便であっ

たが、今は高速道路が開通し丹東市からも大連市からも比較的簡単に行けるようになった。Tさんは娘さんとお孫さんに腕輪を購入されたようだ。

まもなく丹東駅に到着した。帰りは14時41分発の動車（和諧号）の切符を購入した。一人114.5元であった。なぜか端数が付く。少し早い時間であるがこの電車は大連北駅に停車後、大連駅まで行くので利便性を考えて決めた。動車は定刻17時31分に到着した。歩いてホテルに戻って一休みすることにした。一日案内してもらった李さんには日本から持参したお土産を渡してここで別れた。李さんは四川省の出身で近くの勝利広場の地下3階で「麻辣香鍋」という四川料理店を営んでいるのでお店に帰られた。SさんとTさんは今回の旅行で李さんのお店の激辛の四川料理を食べる機会がなかったと残念がられていた。休憩中に私は1階のフロントで日本円を元に交換してもらったが1万円が600元もあり、成田空港で換金しなくてよかったと思った。日本の銀行は交換手数料を取りすぎかもしれない。

夜は、大連空港に迎えに来てくれたもう一人の李さんと私が大連時代に1年間過ごした社宅であった九州国際ホテルで待ち合わせた。大連駅前にあるこのホテルの3階に中国人の沙さんという方が経営している日本料理の「江戸前」がある。住んでいた時は毎週のようにこの店で食べたが安くてとても美味しい。沙支配人にお会いしたかったが残念ながらその日は不在であった。寿司も日本の職人の味である。明日は旅順方面に李さんの案内で行くので打ち合わせを兼ねた夕食会である。李さんにはお世話になるので日本からいくつかのお土産を持参した。その一つが娘さんに生まれてちょうど1歳の女の子がいるため、是非にと頼まれてミルク缶を3人で手分けして6缶持ってきた。流石に重いので明後日に渡すことにして軽いものだけを差し上げた。以前粉ミルク事件があったのでミルクに関しては自国の製品に信頼を置いていないようである。かくて今日も早一日が終わった。（続く）

東西文明の比較(33)
天皇の呼称

陽光新聞社・顧問塩澤宏宣

平成も終わろうとする昨今、東アジアは風雲急を告げています。なかでも韓国国会議長の元慰安婦に関しての天皇についての発言には、いささかの疑問を感じます。

そこで、今回の原稿は、我が意見を述べてみたいと思います。

※「天皇」の称号が使われる以前

「天皇」という称号は7世紀ごろに使われ始めたとされます。この称号について考えるとき、われわれは当時の日本の巧みな国際戦略と、当時の日本人の気概について、うかがい知ることができます。

「天皇」の称号が使われる以前、日本の君主は「オオキミ(またはオホキミ)」や「スメラミコト(またはスベラギ、スベロギ)」と呼ばれていました。「オオキミ」は漢字で「大王」と書き、史書にも記され、一般的に普及していた呼び方でした。一方、「スメラミコト」は格式ばった言い方で、「オオキミ」の神性を特別に表す呼び方でした。謎めいて儀式的な響きのする「スメラミコト」が何を意味するのか、はっきりとしたことはわかっていませんが、いくつかの解釈があります。その代表的なものが、「スメラ」は「統(す)べる」、つまり統治者を意味するという説です。このほかに、神聖さを表す「澄める」が転訛したとする説もあります。

「ミコト」の意味ははっきりしており、神聖な貴人を表します。「スベラギ」や「スベロギ」は、「スメラ」と「キミ」の合成語ではないかとする説があります。

では、「オオキミ(大王)」や「スメラミコト」が「天皇」となったのはなぜでしょうか。608年、聖徳太子が中国の隋の皇帝・煬帝に送った国書で「東天皇敬白西皇帝(東の天皇が敬いて西の皇帝に白す)」と記されていました。「日本書紀」に、この国書についての記述があり、これが主要な史書の中で、「天皇」の称号使用が確認される最初の例とされます。

遣隋使の小野妹子ははるばる海を渡り、隋の都・大興城(現在の西安)へ赴きました。その時、携えていた有名な国書に「日出處天子致書日没處天子無恙云云(日出ずる処の天子、日没する処の天子に書を致す、恙無しや、云々)」と書かれていました。この国書に対し、煬帝から返書があり、さらに、その煬帝の返書に対する返書として、日本から送られたのが、上記の「東天皇敬白西皇帝」の国書です。日本が自らの君主を「天子」や「天皇」と明記して、国書を差し出したことには大きな意味があります。当時、日本は中国から「倭」と呼ばれ、その君主の称号として「倭王」を授けられていました。中国では、皇帝が最高の君臨者で、その下に複数の王たちがいました。中国の王は皇帝によって、領土を与えられた地方の諸侯にすぎません。つまり、「倭王」は中国皇帝に臣従する諸侯の一人という位置づけだったのです。朝鮮半島諸国の王なども同様の扱いでした。

7世紀、日本は中央集権体制を整備し、国力を急速に増大させていく状況で、中国に対する臣従を意味する「王」の称号を避け、「天皇」という新しい君主号をつくり出しました。皇国として、当時の中国に互角に対抗しようという大いなる気概が日本にはあったのです。

※国際情勢を的確に把握していた首脳部

日本が中国と対等であることを国際的に宣布することは戦略的にも重要でした。当時、日本は朝鮮半島南部を服属させていました。現在の韓国の大半は日本の一部だったのです。「広開土王碑」によると、日本は391年、百済を服属させ、新羅と百済は王子を日本に人質に差し出していました。「日本書紀」の雄略紀や欽明紀では、日本が任那をはじめ伽耶を統治していたことが記されています。ここで言う伽耶は朝鮮南部の広域地域を指す呼び名です。「日本書紀」は、日本が朝鮮半島を支配した証拠や根拠となる史実を論証することを編纂の目的の1つとしていました。中国の史書「宋書」の中の「夷蛮伝」では、倭の五王の朝鮮半島への進出について、記述されています。このように、領土拡張を続けていた日本は中国に対し、へりくだる必要はなく、朝鮮半島をはじめとする東アジア諸地域に対し、日本の優位性を示すため

にも、日本の君主は中国への臣従を意味する「王」の称号を捨て、自ら「天皇」を名乗ったのです。中国皇帝も日本の国力を考えれば、日本の意向を無視できないはずだと、聖徳太子をはじめとする日本の首脳部は見抜いていました。

当時の日本が国際情勢を見据えた戦略の中で、「天皇」の称号を打ち出したことは時宜に応じたものであり、優れた大局観であったと言えます。今日まで続く「天皇」の称号には、古代日本人のあふれる気概が息づいています。7世紀後半の第40代天武天皇の時代には、「天皇」の称号が一般的に使われようになり、孫の文武天皇の時代の702年に公布された大宝律令で、「天皇」の称号の使用が法的に定められます。

※「スメラミコト」に匹敵する漢語表現

では、「天皇」という言葉そのものはどのようなことに由来するのでしょうか。中国の神話では、「天皇(てんこう)」・「地皇(ちこう)」・「人皇(じんこう)」の3人の伝説の皇が世界を創造したとされます。その中でも「天皇」は最高神です。道教でも、「天皇(てんこう)」が崇められています。日本には「オオキミ(大王)」という俗権的称号のほかにも、「スメラミコト」という聖権的称号がありました。最高祭司としての「スメラミコト」に匹敵する漢語表現(つまり当時の国際言語)を探し求め、宗教的かつ神話的な意味を持つ「天皇」がふさわしいと選定され、この称号によって、「オオキミ」が天の神の子孫であることを知らしめようとしたと考えられます。そして、同時に、その子孫の血統を守ることも強く意識されて、天皇の地位は天皇家の家系にのみ、独占的に世襲されることの正統性も導き出しました。「天皇」は中国皇帝に唯一、対抗できる称号だったわけです。

では「皇帝」の称号のほうは、どのような由来を持っているのでしょうか。秦王の政は紀元前221年、中国を初めて統一し、始皇帝を名乗ります。この時、「皇帝」の称号が誕生しました。前述の世界創造神の三皇に加え、その世界を受け継いだ帝王である伝説の五帝がいます。この五帝の中に夏王朝の堯・舜などの帝王も含まれます。三皇と五帝を合わせて、「三皇五帝」と言い、秦の始皇帝は、これら「三皇五帝」をすべて統合するという意味で「皇帝」の称号をつく

りました。「皇」は王と同じ意味ですが、王の上に、光輝くという意味の「白」が付いています。つまり、「皇」は「王」よりも格上の称号です。「帝」は束ねるという意味があり、統治者を指す言葉です。糸偏をつけた「締」は文字どおり、糸を束ねるという意味です。したがって「皇帝」とは「世界を束ねる光輝く王」という意味になります。始皇帝は、自らが伝説の聖人をしのぐ最高存在であることを示そうとしました。

※煬帝の「2つの返書」の真偽

このように最高の存在とされた皇帝ですから、隋の皇帝・煬帝は日本の国書「日出處天子致書日没處天子無恙云云」で、日本の君主が「天子」と名乗ったことに、立腹したとされるのもうなずけます。興味深いのは、その手紙への返書です。「日本書紀」によると、その返書には、日本の君主を「倭皇」とすることが記されていたとされます。「倭王」という臣下扱いではなく、対等の「倭皇」と表記されていたというのです。しかし、不自然な点もあります。

煬帝の返書を受け取った小野妹子は、それを朝鮮の百済で盗まれて紛失してしまったと言っています。ところが小野妹子に同行して日本に来訪した中国側の使節・裴世清(はいせいせい)も、煬帝の返書を携えていました。裴世清の持っていた返書は盗まれることはなく、無事に日本に差し出されました。その差し出された返書に「倭皇」と記されていた、と「日本書紀」は伝えています。つまり、煬帝は小野妹子と裴世清の2人に、2つの返書を持たせていたこととなります。この不可解な話について、さまざまな解釈があります。煬帝の返書は実際には、日本を臣下扱いするものであったため、小野妹子が返書を破棄したという説などです。

いずれにしても、君主の称号は日本の国際的な立ち位置を決定するうえで極めて重要なものであり、「日本書紀」などの史書も、そのことを強く意識し、「天皇」の称号について記録しています。「天皇」は英語で「エンペラー(emperor)」、つまり「皇帝」ですが、その称号の誕生の歴史的背景を鑑みれば、本来、「エンペラー」とは異なるものであり、やはり天皇は「天皇(TENNO)」としか言い表せない存在なのです。

4. 肉類

チベット系部族の人達は肉が好物で、もてなしの宴席では肉料理が中心になり、食べ切れないのを承知で次々に肉料理が出されます。そして残り物を家人が何日も掛けてお腹の中へ入れて行きます。

①豚肉と干し肉と香腸:

日常食べる肉類のほとんどが新鮮な豚肉で炒め物やスープにされます。特に中国語で「排骨(páigǔ、四川弁でパイクー)」と呼ばれる肋骨一帯の肉が珍重され他の部位より割高で、塩と山椒を加えて1時間位煮込むだけのスープが特に好まれます。鼻や耳や尻尾や足まで食べられるのはご存じの通りです。

(写真9)は冬場に農家の平屋根で豚肉の大きな切り身に塩を塗って干す様子です(暖くなると蠅が卵を産み付けますのでご用心)。干した豚肉は当地で臘肉(larou、四川弁でラーズー)と呼ばれ、所謂ベーコンですが日本人が食べ慣れた物とはかなり違っていています。チベット語の方言は幾つもあり「パシヤ」もその一つです。干した豚肉は1年を通して保存食になり、食べる時に30分~1時間茹でて柔らかく戻した後で煮込んだり炒める場合が多いですが、生でも食べます(外国人は真似しない方が良いでしょう)。

香腸は粗挽きの豚肉と脂身を唐辛子や山椒や塩と混ぜて腸詰したもので、干して保存します。豚を潰した時に出る血も腸詰し干して保存します。近年町へ下りて来て生活するギャロンチベット族が増え、肉屋に干し肉や香腸を作って貰うケースが増えています。今年の干し肉の価格は半乾きで35元/斤、完

成品で50元(1元≒17円以下同じ)/斤(1斤≒500g)でした。(写真10)はそんな肉屋に吊るされた香腸です。

②ヤク肉とジャーキー:

ヤクは標高4000m前後の山地で放し飼いされていますので肉は固く一晩~二晩煮てから食べる事が多いです(新鮮な肉をそのまま炒めたり挽肉ハンバーグにしても外国人には固くて不味いです)。ヤク肉も干して1年を通した保存食にされ、農家の納屋や厨房の端に吊るされている姿を多く見掛けます。ヤク肉は自然食品として2000年代初めから欧米に輸出され始めて以来、国内でも経済発展と共にヤクの生肉やジャーキー等の加工品の需要が増えてスーパーマーケット等での少量の小売価格が高騰しています。

(写真11)はジャーキーですが、肉質の良い部位とは言え300元位/斤で、私は買うのを躊躇する程でした。ただ農家が売っている自家製ジャーキーは今年(2019年)80元位/斤で、2年前に比べて20%位上がった程度です。

③他の肉類:

鳥肉料理も好まれます。特に鶏を丸ごと煮込んだスープは珍重されていて何時の時代からか(野生の雉等と共に鳥占いに使われた時代もありました)お目出度い時や大切な来客時に供されます。鶏肉を細かく切って炒めるような料理は漢族の間では一般的ですが、チベット族の間には未だ浸透していません。鶏は農家で放し飼いされているだけでなく町のアパートの屋上等でもケージに入れて飼われています。鶏卵も流通していて10元/斤前後です(成都ではケージ



写真9 豚肉の大きな切り身に塩を塗って干す様子



写真10 肉屋に吊るされた香腸



写真11 ヤクのジャーキー



写真 12 総菜売り場に吊るされた鴨の丸焼き

物の鶏卵が 5 元/斤前後、放し飼いされている物で 10 元/斤前後です)。

また漢族がもっぱら食べていた鴨の丸焼き(一羽 35元)や、昔から珍重されてはいるものの余り口にしなかった羊(部族によって事情が変わります)も、近代になって広く食べられるようになっていきます。(写真12)は、中国に何度も来られている方々には見慣れた、市場の総菜売り場に吊るされた鴨の丸焼きです。

5. 野菜・果物・山菜・調味料類

丹巴では、成都から持ち込まれた物が多い市場の店頭だけでなく、道路際に農家の人達が並べた色々な地元の野菜を買う人が多いです(チベット系部族の人達はあまり野菜を食べないとされていますが、半農半牧を生業とするギャロン・チベット族は野菜を沢山食べています)。

農家の人達が旬の時期に並べる品目は多い順に白菜類・オウスン(セロリの仲間ですが葉っぱより茎の方を主に食します)・ネギ類・キャベツ・じゃが芋・トマト・香草・青梗菜・^{くきにんにく}茎大蒜・蕻・人参・胡瓜・茄子・いんげん豆・えんどう豆・ドクダミ・南瓜・唐辛子(緑色の熟してない物と赤色に熟した物)・大蒜・山椒等で、春先には山菜のゼンマイやウド新芽(2000年代中頃から人気が出始め価格も上昇中です)、初夏のサクランボに続いてザクロ・リンゴ・ナシ・胡桃・^{ぼんかん}極柑(原種に近いポンカン)が初冬に掛けて順番に並

べられます。胡桃(ペルシアグルミ)と梨(西洋梨が多い)とリンゴ(リンゴは近代になって栽培を始めました)と極柑は冬場の貴重なビタミン供給食で、胡桃は小粒が 8 元/斤で大粒が 12 元/斤、梨は 4 元/斤、リンゴは中位の富士が 6 元/斤でゴールデンデリシャスが 4 元/斤、極柑は 4 元位/斤です。

なお調味料雑穀専門店では乾燥した赤色の唐辛子・大蒜・山椒・生姜・胡麻・昆布・豆類等が年中売られています。

夏に出回る茸の類(松茸は珍重されますが嗜好されてはいませんが)も昔から好まれスープや炒め物にされます。松茸は当地でも高価な食べ物になっていますが、2000 年代初めまでは見向きされない代物で、日本への出荷と中国都市部での消費が増えて価格が高騰してから、貴重な珍味として人気が出て来ました。松茸は“松茸採り”が市場の近くや道路際に直接売ります。松茸は年毎に豊作不作が有って価格は上下しますが、昨年は 100 元位/斤になりました。

蛇足ですが、ご紹介した食べ物は 2000 年代に入ってから急激な経済発展で随分と値上がりしているものの、食生活は全体として大変豊かになっています。2000 年代初期と 2010 年代末の物価を比べると、四川で庶民的な生活をしている私の眼から見て「生鮮な肉・卵や野菜・麺やパン類等の生活を支える基本的な食品」が 2 倍位に値上がりしています。他に「服飾品や椅子や自動車等の生活機材」が 3 倍前後、「農家収入や給料」は格差が広がって 3~10 倍位(限られた地域ですが四姑娘山のように観光開発の波に乗った所では数 10 倍)、「マンションのような投機財(成都では空いた部屋が目立つのに値上がりが続く一般勤労者が家を買って難しくなっています)」が 5 倍前後に値上がりしています。ただパソコン・TV・洗濯機等の家庭電気製品は性能を加味すると値下がりした一方で、iPhone 等の人気の高い電気製品は外国よりも割高な価格で流通しています(最近 2 割位値下がりしたそうですが未だ割高です)。

●大川さんのホームページ <http://rgyalrong.info/index.htm> <http://rgyalrong.info/scholaweb/conts.htm>

▲お知らせ：女王谷の HP (<http://rgyalrong.info/>) に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ (MP4 形式 8MB 前後) 1 分余り×15 本を追加しました。日本語 HP に入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。
(<http://rgyalrong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>)

もう こうねん どうてい のぞみ ちょうじょうしょう たてまつ
孟浩然の「洞庭に臨み張丞相に上る」

報告:花岡風子

今回のお題は孟浩然 (689~740) の「洞庭に臨み張丞相に上る」という律詩でした。孟浩然と言えば「春暁」。「春暁」と言えば孟浩然というほど、有名な詩人で、二百首あまりの作品を残していますが、その中で最も有名なのは「春暁」です。

孟浩然是盛唐の詩人、特に山水詩に長じていました。同じく田園詩人の王維とともに「王孟」と称されることもあります。玄宗皇帝に仕え、役人として活躍することを切望しながらも、終ぞその望みは叶わず、郷里の鹿門山に隠居して、51歳で亡くなりました。

この詩は、孟浩然より一回り年上の友人、張九齡に贈り、張九齡の推薦を得て玄宗皇帝にお仕えしたいという気持ちを表したものだと言われています。この時、張九齡は玄宗皇帝の丞相(宰相)でした。張九齡と孟浩然、王維の3人はそれぞれ一回りほど年齢差がありましたが、一緒に詩を詠み、酒を酌み交わした所謂「忘年之交」だったようです。

この詩「洞庭に臨み張丞相に上る」を書いたのは、733年、44歳の時でした。当時孟浩然是長安で仕官の道を求めていました。張九齡は孟浩然を玄宗皇帝に引き合わせようとしてくれますが、肝心な時に身を引いてしまい、なかなか接見できません。

ただ一度だけチャンスがありました。それは友人王維がこっそり孟浩然を役所に連れ込んでいた時のことです。その時たまたま玄宗が王維の役所に現われたのです。お咎めを恐れた王維は孟浩然を隠そうとしたのですが隠しきれず、やむなく彼を玄宗に紹介しました。孟浩然の名を兼ねてから耳にしていた玄宗は喜んで、孟浩然に詩を見せるよう命じました。

とっさのことに驚いた孟浩然是『歳暮帰南山』(歳暮南山に帰る)と題する詩を一首進呈しました。その中に「不才明主棄」(才能がないから、主君に見離された)という一句がありました。それに目をとめた玄宗皇帝は立腹し「卿自不求仕、朕未嘗弃卿、奈何诬我？」(お前自ら、仕えようとしなかったのであり、朕が捨てたわけではないのに、何故に朕を恨む?)と言って立ち去ってしまいました。結局、官吏になる道は閉ざされてしまいました。「自分は才能がないから捨てられた、とへりくだったつもりが、皮肉なことに本当に捨てられちゃったんですよねー」と植田先生。

或いはこれはかつて科挙に落第したときの作で、「明主に棄てられた」とは、「己の力不足のため試験に落第し、陛下のお役に立てなくて残念だった」ということを言いたかっただけのことかもしれません。だとすれば玄宗の誤解ということになりますが、いずれにしてもここでこの詩を持ち出したのは大失敗でした。

「但しこの話は『新唐書』孟浩然伝に記載されたものがもとになっています。どこまで真実か確証はありませんが、このタイミングの悪さ。この詩人の生きざまをよく表していますね」と植田先生。

そんな背景を知った上で、詩の音読練習に入りました。

lín dòng tíng shàng zhāng chéng xiàng mèng hào rán
臨洞庭上張丞相 孟浩然

bā yuè hú shuǐ píng	yù jì wú zhōu jí
八月湖水平	欲濟無舟楫
hán xū hùn tài qīng	duān jū chǐ shèng míng
涵虛混太清	端居耻聖明
qì zhēng yún mèng zé	zuò guān chuí diào zhě
氣蒸雲夢澤	坐觀垂釣者
bō hàn yuè yáng chéng	tú yǒu xiàn yú qíng
波撼岳陽城	徒有羨魚情

八月湖水平らかに
虚をひたして太清に混ず
気は蒸す雲夢の沢
波は撼かす岳陽城
濟らんと欲するも舟楫無く
端居して聖名に恥ず
坐ろに釣を垂る者を観れば
徒らに魚を羨むの情有り

これは、律詩ですので、二句ごとにまとめて一つの聯とします。最初の二句を首聯、次を頷聯、その次を頸聯、最後を尾聯といたします。では、首聯から意味をみてみましょう。

首聯：旧暦八月の洞庭湖は、増水のため岸辺が隠れて水面が平らかに見え、湖の窪みは満々と水を湛えて大空に接し、薄靄に覆われて湖面と空の色が混じりあって見える。

頷聯：靄は雲夢沢（昔長江中流域にあった巨大な沼沢地。洞庭湖もその一部）一帯に立ち込め、ひたひたと打ち寄せる波はまるで岳陽城を揺るがせているかに見える。

頸聯：ところが、湖を渡ろうにも、船も舵もなく、何もしないでただぼんやりと平生を過ごしているこの私。聖明なる天子様（玄宗皇帝）に顔向けできず、実に情けない。

尾聯：為すこともなくただぼんやりと、釣り糸を垂れている人の姿を見ていると、魚を羨む気持ちが故もなく起ってくる。

首聯、頷聯で洞庭湖とその周りに広がる広大な湿地帯の雄大な景色を描写しています。

頷聯と尾聯では打って変わって、玄宗皇帝に仕えたいと思いながら何もできない自分の不甲斐なさを嘆くような内容になっています。「前半で玄宗皇帝の素晴らしい唐王朝の治世を、洞庭湖の雄大な風景に見立てていますね。唐が最も栄えた時代を連想させます。ところが、後半はなんかウジウジとした人間の姿が浮かんできま

すねえ。このコントラストが面白いですね。」と植田先生。

前半は玄宗皇帝に対する強い憧れ、そして自分もその配下に入って、世の中で活躍してみたい、という作者の純粋な気持ち。舟と楫とは、広大な洞庭湖を渡るための手段。それが無いということは、かくも偉大な君主に仕えようにもそのツテがないという状況を暗示しています。聖明とは、天子の尊称です。「垂钓者」とは、太公望呂尚のことです。ここは、周の文王と太公望呂尚の出会いが典故になっています。

呂尚が釣り糸を垂れているところに文王が現れます。ふと見ると、呂尚の釣り糸には釣り針が付いていません。呂尚は、文王という魚を釣ったのであり、文王は、呂尚という有能な軍師を得た、という有名なエピソードです。

最後の句は「魚になりたい」という意味にも取れるし「魚を釣り上げる漁師になりたい」とも取れます。後者なら「官位を釣り上げたい」という気持ちを表し、別の典故^註)もありますが、ここでは、才能を認めて自分を引き上げて欲しいと友人に送った詩ということから、どちらかというと「魚になって釣り上げられたい」という気持ちが強かったのでは、と推察されます。そう解釈することによって、この詩人の切ない思いが「徒（いたずらに）」の一字と相まって、いや増しに伝わってきます。

「孟浩然という人はね、最初は仙人になりたかったんですよ。というのは、孟浩然が生まれたのは則天武後の治世の安定期でしたが、青年期は武後の晩年以降、武後の息子中宗の嫁である韋后が権勢を振るい始めた時代で、かなり酷い時代だったんですよ。だから、そんな王朝に仕官するより隠遁生活した方がまだ、と思ったのでしょうかね。これも素直な気持ちでしょう。ところが、玄宗皇帝の時代になって、王朝がつかないほど安定して隆盛を極めたので、ムラ

ムラと世の中に出たいという気持ちが湧き上がってきたのですねえ。でも、そこを玄宗皇帝に見透かされてしまったというか、とにかく嫌われちゃったんですね。玄宗皇帝に仕えたい。でも、孟浩然もプライドがあるから、なりふり構わず、というワケにいかない。ちょっと引いてかかるというかね、謙虚に振る舞いたいですね。俺は天才だ、という雰囲気李白とは違ってね。二人は無二の親友でしたが、性格はずいぶん違いますね。うーん、こういう性格の人、いると思うんですよね。私もちょっとそういうところあるかなあ、なんて思うんですがね」。植田先生の解説とユーモアに一同から笑い声が止まりません。

「この詩は大きく出て、小さくまとめる、というかね。本当は逆がいいのでしょうかね。気取らず飾らず、ごく自然に自分の弱みを詩の中に曝け出す。そこに彼一流の美学を感じます。孟浩然是杜甫ともちょっと違って、社会性には欠けますが、何かこう人間臭いところが魅力ですね。ただ孟浩然にとって幸せだったことは、楊貴妃にのめり込んでいく玄宗皇帝の醜い姿を見る前に世を去ったことでしょうかね」。

植田先生の解説のお陰で、かの有名な「春暁」の作者も、ウジウジしたところのある人間味のあるオジ様にみえてきました。思い返せば、アラフォー女子もかつて清貧な晴耕雨読の田舎ライフに憧れていた若い時がありました。でも、今、あの頃の自分に対しては「もっと勉強して、広い世界に出ろ！」と言いたいので、素晴らしい君主の治める新しい社会に身を乗り出したくなった孟浩然の気持ちも分かります。

しかも、年齢的に孟浩然が世を去った時期に刻々と近づいている昨今、焦りと諦めが縋い混じったような複雑な心境も想像がつかます。

千年も昔のこと、孟浩然是田舎に隠居して仕官を諦めましたが、今は人生 100 年時代なのです。50 歳になっても、あと 50 年生きられる可能性もあるのです！

つべこべ言わず、勉強をしたら、なん歳からでも、チャンスはあるかもしれない、と自分に言い聞かせる今日この頃です。

[注] 臨河而羨魚，不如归家织网：河に臨んで魚を羨むは、家に帰って網を織るに如かず＝魚が欲しければ家に帰って網を編め。手段を見失っては、事は成就しない。『淮南子』説林訓。

一掬いのご馳走 李晴 (2001 年 3 月号より)

子供の頃、冬になると新年を迎えるのが待ち遠しかった。年が改まると、その日学校で先生と生徒全員と一緒に食事をする決まりになっていた。私たちの学校は先生が一人と生徒が数十人だけだったが、その他に数十頭の羊が飼われていた。冬に羊が食べる草は全部生徒たちが刈り取って用意をするため、新年の会食はいわばその労をねぎらうといったものだった。

草の刈り取りは決してなまやさしいものではなかった。学校の決まりでは、学年によって刈り取る草は何百斤と決まっていた。私が 1 年生の時には百斤 (50kg) の草を刈らなければならなかった。その年私は 6 歳になったばかりで、自分だけでは刈り取る事が出来なかった。家に帰り、母に泣きついたが、その頃の母は病身でとても外で働くことなどできず、どうしようもなかった。そこで私は曾祖

父に泣きついた。曾祖父は父の祖父で、そのとき70歳をとっくに過ぎていたが、私の目には家の中で唯一私を可愛がってくれる、壮健な人に見えた。太陽が山に落ちるころになって、曾祖父は案の定、草を一括り背負って戻ってきた。私の頭をなでながら曾祖父は半分とがめるように言った。「自分で背負って持っていくんだぞ！」とても出来ない話だった。結局はやはり曾祖父が草の束を背負って学校へと運んでいってくれた。私は曾祖父のはるか後ろから着いてゆき、曾祖父のゆっくりと動く後ろ姿を見て、心中とても恥ずかしい思いをしていた。2年生になると、刈り取りの草は二百斤にふえた。そしてやはり私は母に泣きつき、曾祖父に泣きついた。5年生になって私はどうにか自分でもいくらかの草を集めることが出来た。しかし、5百斤もの草は、やはり曾祖父の助けが無ければまかなえなかった。

あの秋の日々、曾祖父はしょっちゅう山へ入り、私のために一括り、一括りと草を刈り集めてくれたものだった。

年の改まりを告げる鐘の音が鳴り響くころには、もうあの草の刈り取りの辛さやいかんともしがたい切なさは、私たちから遠く離れたものとなっていた。ある年の冬、学校は十数匹の羊をと殺し、元日に先生が私たち生徒に食べさせてくれることになった。私たちは大喜びで家を出、早々と学校へと向かった。生徒たちは箸を持ち、碗を抱え、ある者は新しい服を着てやってきた。教室や校庭のあちらこちらから私たちの笑い声や歌声が聞こえていた。男の子たちが持ってきた爆竹は樹の枝に掛けられ、ぱちぱちと賑やかな音をたてていた。朝が過ぎてしまった、しかし先生の

顔は見えない。昼が過ぎていった、それでも先生がやって来て私たちにご馳走を食べようと大声で呼ぶことはなかった。皆はお腹をすかせ、すっかり元気を無くしてしまった。炉を取り囲むようにして座り込み、箸で茶碗を叩いた。「東の風が吹き、戦の太鼓を叩く、いまこの世界で結局誰が誰を恐れると・・・」がやがやしているところに先生がやって来た。先生の顔は赤くてらてらとしており、酒くさかった。

私たちの先生は他所から来た人だった。小さく尖った顔立ちで、年は30を過ぎ、常日頃はとても厳肅な様子の先生だった。その日先生はむしろ嬉々とした様子で私たちに向かって言った。「君たち来なさい、7人か8人、来なさい」私たちは黙ってしまい、誰も身動きをする者はいなかった。とうとう、入り口近くにいた数人が先生の後について職務室の方へと行った。私もその後ろについていった。先生の職務室は先生の寝室でもあった。私たちが部屋に入ったとき、部屋の中には靄が立ち込めていて、何も見えなかった。しかし、濃厚な羊の肉の香りは部屋中に充満し、酔っ払っている人たちから漂ってくる酒の匂いの中からも羊の肉の芳しい香りがしていた。私たちは皆思わず口からよだれをたらしてしまった。

先生のオンドルの上には何人かの人が座っていたが、彼らが誰で、何の話をしていたのかはよく分らなかった。先生は私たちを一行に並ばせ、羊の肉が入った大きな深皿を両手で持ち運びテーブルの上に置いた。羊の肉はとっくに料理されていて、細かく切り砕かれ、おまけに深皿の中で凍っていて、まるで白っ

ぼい草の切り株のように見えた。そして、その上には小さな氷のかけらがくっついていていた。

先生は私たちに向って言った。「今日は火の具合が悪くて上手く出来なかった。君たち、こうやって搦んで食べて、もうそれでいいだろう」私たちは互いに顔を見合わせた。どうしたら良いのか分らなかった。ただ先生が両手を伸ばして深皿から掬い上げ私たちの前にやってきたのが見えた。「手を出して！」私たちは恐る恐るしもやけで赤くなった小さな手を伸ばした。先生はすぐに私たち一人一人の手の中に一掴みの羊の肉を放った。みんなもうとっくにお腹が空いていてたまらなか

った、頭を低くして羊の細切れを口の中に入れた。すっかり冷たくなった羊の肉はとても硬かった。歯に染みる冷たさと悔しさと私たちは皆涙を流した。

何年か後、私たちの先生はついに村中の人の罵声の中、村を出ていった。私もまた中学に入り、遠くへ行った。しかし、あの冷たい羊肉、あの歯軋りをするような悔しさ、草の刈り取りの時の苦労と曾祖父のゆっくりと動いてゆく後ろ姿は、いつも新年のぞわめきのなかで、はるか遠くしかしはつきりと私の心に浮かび上がってくる。

(翻訳：岩田温子)

海外出張の思い出 (13) (ナイジェリア編①)

高島敬明

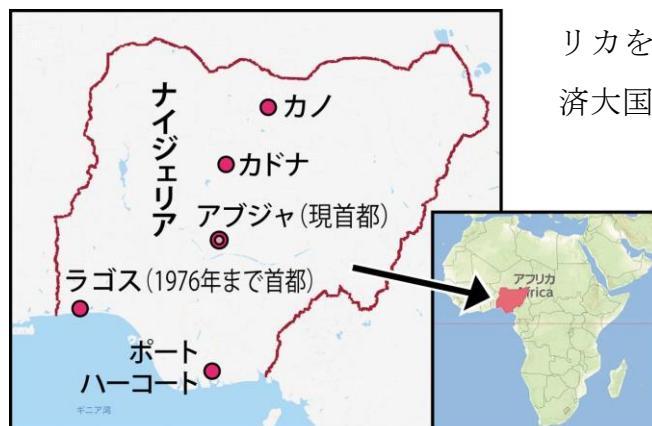
★ナイジェリア KADUNA リファイナリー器機輸送、据付作業

前号までは、旧ソ連のノボロシースクでの海外出張記でした。今号からは、ナイジェリアでの海外工事の思い出を書き綴っていきたいと思います。ナイジェリアという国は読者の皆さんの殆どは詳しくご存知ないのではなかろうか、と思います。ある方は、2014年に発生したイスラム過激派組織「ボコハラム」が女子生徒 276 人を拉致した事件のイメージかも知れません。またある人はサハラ砂漠とか、奴隷海岸を思い起こされるかもしれませ

ん。この海外出張記は 1979 年—つまり今からちょうど 40 年前のナイジェリアの様子を書いたものです。

まず現在のナイジェリアがどのような国なのかを見ておきましょう。ナイジェリアは赤道のすぐ北に位置し、面積は 92 万 4 千平方キロと日本の約 2.4 倍の広さです。人口は、1 億 9 千万人とアフリカ最大です。イギリス連

邦加盟国で、2014 年には南アフリカを抜いてアフリカ最大の経済大国となりました。1960 年に独立、首都は大西洋（ギニア湾）に面した都市のラゴスとなりましたが、1976 年に国の中心地であるアブジャに遷



都することを決定し、1991年に正式に首都となりました。アブジャの市街地の中心部のマスタープランは、建築家の丹下健三氏によるものなのです。国名のナイジェリアは、同国を流れるニジェール川から採用されたものです。

1979年（昭和54年）3月に、1年にわたる黒海での仕事を終え帰国しやれやれと思っていた矢先、アフリカのナイジェリア国のカドナリファイナリーの建設工事に従事する話が持ち上がりました。この仕事は当時在籍していた名古屋支店で、主にラゴスから1千キロ奥のカドナまで、資機材の水切りから現場までの輸送の仕事、及び現場で使用するすべてのクレーン重機を日本から運び現場に供給することでした。現地での工場建設の据付工事は当社・鶴見支店が担当していました。日本からの輸送から機器据え付けまで、当社が一貫受注した海外工事としては大規模なもので、すでに実施していた重量物運搬のための国道の補強工事などを含め責任者は3年半の長期にわたって家族とも離れて現場工事に従事していました。現場の仕事はすでに大物の機器の据え付けはあらかじめ完了し、最後の追い込みに入っているところでした。輸送作業は通常の機器の輸送と建設作業で使った重機類の撤収という大変困難な作業が、通信も非常に不便な中、同時に進行していました。会社としても出張が非常に長くなった責任者を、これからの激務を考えると交代させねばならなくなったのです。

その後任として私に話が回って来たわけですが、まだソ連から帰って4か月経ったばかりでしたから、「家内と相談して返答いたしま

す」と答えました。家に帰って妻に話しますと、妻は普通の表情で「貴方は行きたいんでしょう、行ったら！」と一言。私はアフリカは二度とチャンスがないかもしれないこと、前任が直属の上司で名古屋に赴任以来大変お世話になってきたU次長であることなど懸命に話して了解を取り付けました。

ただ妻が子供に、「お父さん又外国に行くんだよ」と、小学校に入ったばかりの一人娘に話したとき大泣きをされました。「いやだ！日曜日社宅のお父さん達は自動車で遊びに連れてってくれるのよ！」一番きつい言葉でした。今回の交代劇で一番の問題であった、前任者の体調のこともあり慌ただしく7月の出発が決まりました。

ナイジェリアの続きです。仕事の現場であるカドナを含む北部地方は、サハラ砂漠に連なるやせた土地で、宗教的にはナイジェリアの中では比較的回教の影響が強いところでした。民族的にはイスラム教徒の「ハウサ人」です。西部はイスラム教、キリスト教混合の「ヨルバ人」、それに東部・南部のキリスト教主体の「イボ族」が大半を占め3大民族が国を形成しています。イボ族は、石油を生産する地域であることからイギリスの植民地時代から裕福で、教育程度も高く商売も上手で「黒いユダヤ人」と言われているそうです。

東部ビアフラ州のイボ族は、独立6年後の1967年に石油の利権を持って独立を宣言し、戦争を起こしました。ところが形勢が悪くなりおまけに双方に外国も参入して、フランス、イギリス、ソ連の三つ巴の戦いが続き周りを包囲された凄惨を極める戦いが続いたのです。結局戦いはハウサ人にイボ族が負けて決着し



道路わきの蟻塚。日本の蟻より少し大きめで、毒を持ったものもいるそうです。(1980年5月)

た訳です。150万人の死者が出たと言われていますが、ハウサ人はイボ族に対し制裁を加えることなく融和の道を選択しました。

その後イタリアの映画監督「ヤコペッティ」による「世界残酷物語」が上映されましたが、その中の一つの話として「ビアフラの戦い」が出てきます。テレビのコマーシャルに出てくるような大きく枝が広がった孔雀の羽のようなきれいな大樹の根元に、太陽の逆光を受け黒々とした野球のグローブのような手が山になっている画像がありました。大樹に手を押し付けられてナタで切断された大勢の人の手だったのです。この残酷な現実が1970年に終わったわけですが、私が赴任する10年弱前のことだったのです。

ソ連のゴルバチョフのペレストロイカが1989年ですから世界は激動の時代であったわけです。また、当時から騒がれ始めたサルから人間に感染したと言われている「エイズ」は、ラゴスから少し北の密林の中から世界中に広がったと言われています。

ナイジェリア西部の海岸から今日のペナン、トーゴあたりは、近世「奴隷海岸」と呼ばれ、ここから主として働き盛りの男達がアメリカ

や西欧諸国に売られていった悲しい過去があります。その数1千万人とも2千万人とも言われるそうですが、これがアフリカの経済的、文化的損失に繋がり現在までの貧困の原因の一つとされています。

さて前述の通り慌ただしく準備が始まりました。工事の現状までの説明を受け、大手エンジニアリング会社のC化工建設との打ち合わせが終わり、出発することになりました。私に替わって妻は黙って持ち物の準備を進めてくれました。

心の準備はできているようでしたが、ある土曜日の朝社宅の周りの家々から次々に家族を乗せた自動車が出て行きます。遠くから(北海道)嫁いできた妻は、親も親戚もなく孤独の中で、「この瞬間が一番怖いのよ」と言いました。私がいないと子供と二人じっとこの時間が過ぎるのをカーテンも開けないで過ごすのだそうです。私はこのことを聞きもう家族は犠牲にはできない、今回で海外は終りにしようと思いました。

成田空港を離陸した飛行機は、アラスカのアンカレッジ、次にオランダ・アムステルダムスキポール空港、それからナイジェリア・ラゴス空港と約36時間もの長い旅でした。緊急の現場監督のピンチヒッターのようなものですから、気楽な一人旅でしたが、それもスキポール空港までのことでした。ここまでは機内は日本人が多く日本語も飛び交っていましたが、英語があまり得意ではない私はここで乗り換えた時から試練が待っていました。

次号はそのあたりから書いていく予定です。

(続く)

【中国の笑い話】 41 「365 夜笑話」 より

▲第 138 話 日が長くなる

夏がやって来ました。

先生「一日は何時間ですか？」

生徒「25 時間です」

先生「何を言うんだ。一日は 24 時間と決まっているのを知っているだろ？」

生徒は不満げに答えた。

生徒「でも、先生は昨日、『夏が来ましたね。明るい時間が 1 時間は長くなりました』って、おっしゃったじゃないですか！」

▲第 139 話 小さなベティーの算数

ベティーは学校で算数のテストに合格して得意になって帰って来た。ママが焼いたローストチキンを 2 枚、お皿に乗せて持って来て、テーブルの上に置いた。ベティーは、自分の算数の力を見せたくてパパに言った。

ベティー「パパ、わたし、計算が出来るのよ！ここにチキンが 3 つつあります」

パパ「え？どうやって計算したの？」

ベティー「これが一つ目のチキン、これが二つ目のチキン、1 たす 2 は 3 でしょ？」

パパ「良く計算できるんだね！じゃあ、一つ目のチキンはママに上げて、二つ目のチキンはパパが食べるから、ベティーは三つ目のチキンをお食べ」

▲第 140 話 六七四十三

父親は、眼をむいて厳しい口調で小明を呼んだ。

父親「小明、ちょっとここへおいで！」

小明が恐る恐るやって来た。

父親「九九は全部覚えたのか？」

小明「覚えたよ」

父親「六掛ける七は幾つだね？」

小明はおぼつかなげに答えた。

小明「六七四十…」

父親「六七は幾つなんだ？」

小明「六七四十一」

バシッと小明の顔にビンタが飛んで来た。

小明は急に思い出した。

小明「六七四十二」

父親「よし！これからもちゃんと努力して覚えるんだぞ。怠けたら、又こんな風に叩かれるぞ」

父親はもう一発、小明の顔を平手打ちした。

小明「六七四十三です。パパ！」

小明は顔を押えて大泣きしながら答えた。

▲第 141 話 弟は何人？

「君には弟が何人いるの？」

「弟は一人です」

「そんなはずはないだろう？君の兄さんは弟が二人いると言ったよ」

「弟は一人しかいないです。きっと、兄が間違えたんだ」

▲第 142 話 妹の体重

冬に姉妹で体重を計った。妹が体重計に乗ると、針は丁度 60kg を指した。

姉「そんな厚いオーバーを着ているからよ。オーバーを脱いで計り直したらいいんじゃない」

妹はオーバーを脱いで小脇に抱え、姉に声を掛けた。

妹「お姉さん、オーバーを脱いだわ。もう一度計って！」

姉は体重計の針を見て、驚いて言った。

姉「あら、やっぱり 60 kg だわ。あのオーバーの重さが減った筈なのに！」

(翻訳：有為楠君代)



【‘わんりい’ トピックス】

会員・佐藤紀子(張怡申)さんが自作の絵本「宮沢賢治のセロ弾きのゴーシュ」の売上金・10,000円を‘認定NPO法人・日本雲南聯誼協会’に寄付

会員の皆さんの中には、2月3日の新年会で佐藤(中国名・張怡申)さんの二胡の演奏を聞かれた方がいると思います。この新年会において、絵の上手な彼女が自ら挿絵を描き絵本としたものを展示しました。その絵本は、宮沢賢治の名作童話の「セロ弾きのゴーシュ」です。

筆者は、この本に接し、是非会員が多く集まる新年会でご披露をと要請した結果、展示することになり、希望者にはお売りすることとしたのです。その結果7冊が売れ、絵本と絵本の挿絵の図柄入りトートバッグなど合わせて約1万円弱の売り上げになりました。

代金を佐藤さんにお渡ししたところ、雲南省の恵まれない少数民族の女生徒を支援する活動を続けている認定NPO法人・日本雲南聯誼協会への寄付を申し出られました。当会から少々追加し切りよく1万円にして3月4日、代表と副代表で同協会を訪問し初鹿野理事長に直接お渡ししました。理事長は大変喜ばれ、「佐藤さんとわんりいの皆様によろしく」とのことでした。因みにわんりいと同協会とは以前から友好関係にあり、女生徒から支援者に届く感謝の手紙の翻訳などのお手伝いを

しています。

最後に、佐藤さんにこの絵本を作製した動機をお聞きしたところ次のようなお話がありましたのでご紹介します。

「中国の大学教科書の外国文学には、宮沢賢治の

紹介と作品の鑑賞文が載っていました。中国語の翻訳文であり、物語の一部分の紹介なので良さが全く分からず、国語の先生にどこが良いのか質問しました。先生は即座に「那才叫美那才叫妙呢」と彼の作品を最高に賛美されました。意味は「美しくかつ絶妙だ」とでも言いましょうか。大学を卒業し日本に来て10年経った頃、中国に行った時天津大学出版社版の日中対照の宮沢賢治童話集に出会い、

改めて読んで国語の先生の言われた意味が理解できました。そして2016年5月町田市で「中国語宮沢賢治童話朗読会」を結成、中国語の文法を説明しながらお互いに理解を深めて行きました。そして絵本にしたら子供を宮沢賢治の童話の世界に導くことができるのでは、と思い



自作の絵本「セロ弾きのゴーシュ」を手にした佐藤紀子さん



認定NPO法人・日本雲南聯誼協会にて。[左]‘わんりい’寺西代表、[中]日本雲南聯誼協会・初鹿野理事長、[右]‘わんりい’有為楠副代表

絵本を作りました」

(報告:‘わんりい’代表・寺西俊英)

‘わんりい’ 料理の会・活動報告

肉汁たっぷりの小籠包(しょうろんぽー)と野菜餡の包子(バオズ)の会

2019年3月19日(火)

場所：麻生市民館・料理室

講師：佐藤紀子(張怡申)

上海出身の佐藤紀子(張怡申)さんを講師に迎えて小籠包作りに挑戦した。肉汁たっぷりの小籠包は人気 No.1 の点心だが、蒸し立てのアツアツの小籠包から噴き出してくる汁はどうやって閉じ込めるのか、‘コープみらいの広報紙での当講座の呼び掛けもあってその謎を解こうという面々24名の参加者で大賑わいの講座になった。

謎解きは餡に混ぜておくゼラチンで、そのゼラチンは、中国では豚の皮を長時間煮込んだ煮汁を一晩冷蔵庫に入れ、まるでこんにやくのようにべろんべろんにしっかり固めたものを、肉と同量刻んで入れるのだそうだ。今回の講座では佐藤講師がご自分で作って持参くださったものを使った。

では、日本では容易に手に入らない豚の皮の代替えは？今回の講座で調べて初めて分かったのだが、スーパーなどで販売されている粉ゼラチンの材料は主に豚の皮から抽出されたものとのこと。幼い子供が食べてのどに詰まらせて問題を起こすことがあったグミというスナックも豚皮のゼラチンが原料とのことだ。これまで何回か小籠包に挑戦したことがあるが粉ゼラチンを混ぜたりしたが餡に入れるゼラチンの量がまるで違っていった。水 100cc に付き 5g 強の割合で粉ゼラチンを煮溶かして固めたものを肉と同量、餡に入れると結構理想に近い肉汁量になるようだ。

レシピを‘わんりい’の HP の料理の部屋 <http://wanli-san.com/cooking/cooking%20title> に掲載するので目を通していただきたい。

今回、欲張って野菜餡の包子も講習メニューに入れた。そのせいで、蒸し上りを直ぐに口にできず折角の肉汁が皮に吸収されてしまった。タイミングよく頂けなかったのが残念だった。が、参加者一同、いつものように協力し合いながら小籠包の皮を伸ばし、餡を包んで蒸し上げた小籠包と野菜包子の他、トマトと卵のスープ、キャベツの塩麴漬、美容食といわれる白きくらげと蓮の実のデザートなどで和気あいあいとランチを楽しんだ。

(報告：田井光枝)



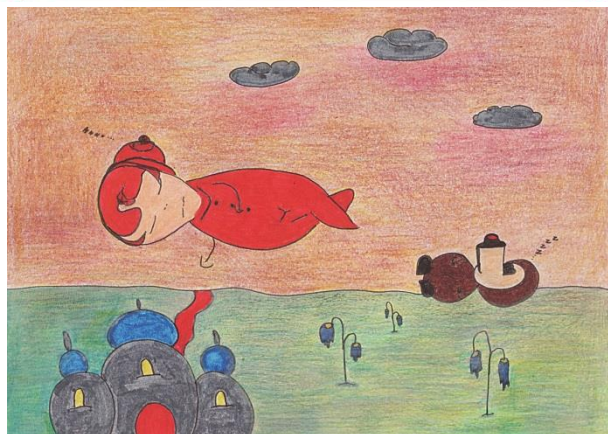
◇ 絶句と朗読

横浜でアマチュア演劇集団のメンバーになったのは、帰国後間もなく。悪人にも善人にも変身する役者の楽しみを劇団文学座の俳優から指導され、久保田万太郎や別役実などの作品に出演した。

好事魔多し。岸田國士作「動員挿話」で陸軍少佐を務めた。馬丁(役の名)を無理に戦場へ出征させる嫌な役。稽古中からセリフと演技になじめない。果たせるかな、本番の舞台でセリフが止まった。忘れてしまったのだ。絶句して10数秒、ため息をつく私をしり目に馬丁役のT君と、妻を演じたMさんがセリフをつないでくれて、幕が下りた。以後、私は芝居をあきらめ、読み語りのボランティアを続けている。

横浜市立M高校1年の時、K国語教師の朗読に感銘を受けたのがきっかけだ。作品は「山月記」「高瀬舟」「トロッコ」「恩讐の彼方に」「セメント樽の中の手紙」(葉山嘉樹)など。いつの日か、人に感動を伝えたい、と思った。(栗生将信)

ようこそ！
SAMIRA イラスト館へ



皆さんは、サミラさんのイラストから
どんなことをイメージされますか。

‘わんりい’ 242号の主な目次

寺子屋・四字成語(21)克己奉公(滅私奉公) ……………	2
論語断片(45)朝闻道, 夕死可矣……………	3
お爺さん三人の大連の旅(2)……………	4
東西文明の比較(32)天皇の呼称……………	6
四姑娘山写真だより(42)女王谷の食べ物(2) ……	8
「漢詩の会」(27)	
孟浩然の「洞庭に臨み張丞相に上る」……………	10
一掬いのご馳走……………	12
海外出張の思い出(ナイジェリア編①)……………	14
中国の笑い話(41) ……………	17
‘わんりい’トピックス……………	18
‘わんりい’料理の会・活動報告……………	19
コラム「絶句と朗読」……………	20
サミラさんのイラスト館……………	20
‘わんりい’掲示板……………	別刷

★4月の定例会

4月16日(火)…13:30～ 三輪センター第三会議室

★5月号おたより発送日

4月30日(火) 10:30～ 三輪センター

第二・第三会議室 (弁当持参)